



ユングフラウに登る加賀正太郎 (左)

ユングフラウに登る加賀正太郎

岡 沢 祐 吉



1991 年 (平成 三年)
2 月 号 (No. 548)
社 団 日 本 山 岳 会
法 人 The Japanese Alpine Club
定 価 一 部 150 円

目 次

- ユングフラウに登る加賀正太郎……………岡沢祐吉…(1)
- 海外の山……………(2)
- 『17人絶望』
- 『スウィス日記』のリングの木…(3)
- ナムチェパルワ峰偵察隊(第2報)……………(4)
- 今は亡き百瀬舜太郎氏を偲ぶ……………孫慶錫…(5)
- 東西南北……………(6)
- 「日本三百名山に登る」「深田久弥氏の著書を蒐集して」「秘境ブータン花紀行(2)」「想い出の粟ヶ岳」「年次晩餐会と記念山行に参加して」
- 図書紹介……………(8)
- 「越後山岳集成復刻版」「南極点」「会報第27号」
- 報 告……………(9)
- 「小川山初級岩登り講習会」「尾瀬全国集会」「忘年会報告」「1989年度資料受入報告(1)(2)」「警司岩探索山行(1)」
- 会務報告……………(12)
- 12月理事会、ルーム日誌、会員移動、タンポチ僧院再建協力者ご芳名、新入会員(復活)、住所・住居表示変更
- お知らせ……………(14)

ここに掲載した写真は、加賀正太郎が一九一〇年(明治四三年)にスイスアルプスのユングフラウに登った時のものである。

この写真を見つけたのは、京都の斎藤惇生支部長の口ききで、加賀正太郎の弟の加賀慶之助氏を長岡天神近くの済生会病院に見舞ったのがきっかけである。

前々から斎藤支部長に、加賀さんの身内の人が正太郎のことを話していたから、ぜひ機会をつくってインタビューしてほしいと言われていたので、婦人懇談会主催の伊吹山登山の帰りに、これを実現した。しかし、この

時は病院内での話だったので、慶之助氏の手元には何もなく、あらためて、山崎の御宅に伺うことにして、いったん失礼した。

去る十一月二十八日、私は斎藤支部長とともに、大山崎町の加賀さんの御宅へ伺った。

僅か一年半たらずの間だったが、加賀慶之助氏も、つき添いをされていた夫人も亡くなって、お目にかかったのはご夫妻の子息の加賀高之氏とその夫人だった。この写真は、したがって、高之氏から見せてもらったものである。

加賀正太郎がユングフラウに登ったときの写真は『山岳六年』にも載っているのだから、同じ写真の原稿ではないかと予想していたが、これまで一度も眼にしたことなかったものなので、斎藤支部長とも相談し、ここにご披露す

ることにした。

加賀正太郎が一九一〇年にユングフラウに登ったときは、まだユングフラウヨッホまで鉄道は開通しておらず、前記「山岳六年」にある「欧州アルプス越へ」を見ると、当時の終着駅、アイスメア駅から氷河に下り、南東のベルクリヒュッテまで父親のヘスラーがトッパで、翌日、ベルクリヒュッテからユングフラウまでは息子がトッパとあるから、この写真に写っているのは、加賀と父親のヘスラーと思われる。したがって撮影者は息子のヘスラーということになる。写真の右後ろに見える山の左のピークがシュレックホルン、右のピークがラウテルアルホルンであることから、この写真がユングフラウへの登りで撮ったものであることが分かる。

加賀はこの時、ヘスラーの案内人手帳に「案内は実に老実なり」と書いていると辻村伊助は『スウィス日記』に書いていますが、一家をあげてカナダのバンフに移住してしまっただけで、バンフの資料館にもこの時の手帳

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室閉室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロフ電話
3234 六六五九

を残していない。調べて見たが、どこにも見当たらないとのカナダ山岳会長の手紙を筆者は受け取っている。息子のヘスラーのほうは、一九四〇年、五十一歳の時に灰色熊に襲われて死んだと、スイスの『スキー教師と山案内人』という雑誌に書いてあった。

この写真で加賀が着ている外套は、フランクフルトで買いたったものうだが、一九一〇年ころのヨーロッパアルプス登山で、このように長い外套を着ている登山者は、筆者の見たかぎり、当時の写真には見当たらなかった。一八八〇年ころパイオニア登山をしてきたストウデル、デュビ、エビイ、フェレンベルクらが、登山姿で撮った有名な写真があるが、外套を着ているエビイとフェレンベルクでさえ、その裾はひざより上で、外套よりハーフコートといえるようなものだ。

辻村伊助、近藤茂吉がこの同じガイドのヘスラーとともにシュレックホルンで雪崩にあったことを考えあわせると、麻生武治名誉会員の言葉を待たずともなく、当時のヘスラーのガイドとしての実力は、ツェルマットやグリンデルワルトのガイドより劣っていたように思える。

ただし、ヘスラーはカナダに移住してからは技術を磨き、かなりたくさん初登頂を重ねたようで、前記『ス

海外の山

「十七人絶望」

二月三日の節分の日、伝統ある京都大学学士山岳会が開いた「家族説明会」は、参加者全員にとって、心の重いものだった。

中国・雲南省の未踏峰、梅里雪山（メイリシユエシヤン 六七四〇呎）で京大を中心とする日中十七人の隊員が消息を絶ってちょうど一ヶ月。合同捜索隊は最後の連絡のあった第三キャンプ（五一〇〇呎）付近に大規模な雪崩の跡を確認し、救援対策本部は一月二十五日、二重遭難の危険を避け、捜索打ち切りを決定した。

日本登山隊として海外での史上最大の遭難となった事故の経過が日本側全十一隊員の家族にこの日改めて説明され、次の捜索の可能性、合同慰霊祭をどうするか、家族に現地に行つてもらえるか、などについても話しあわれた。

なぜ、「全員絶望」の事態になったのか。

詳細は、今後の報告に待つしかないが、予想もしなかった豪雪が、遭難の重要な一因だったことは、確かだ。未踏の山ではあったが、梅里雪山には一九八七年夏、上越山岳協会隊が挑戦しており、京大も八八年の偵察、八九年秋の本隊に続き、三度目の体験だった。天候が極めて変化しやすい山で、時に大量降雨と積雪をもたらすことは、無論承知していた。

悪天で動きがとれなかった、という上越山岳協会隊の話から京大隊は夏を避け、「秋か冬」に時期をしばった。が、「秋」は、失敗する。

「八九年には十、十一月に行つて手前の峠で大雪に阻まれてしまった。その時の教訓から今回は再度現地の気象データを検討し、十二月、一月を降水率の最も低い時期。」

十二月は、その予測が的中し、登山隊は順調にキャンプを伸ばした。二十八日には、最初のアタック隊が第三キャンプから出て、悪天で引き返している。

三十数年ぶり、という豪雪がその後続くとは、誰も予想していなかった。一月三日午後九時、「テントも三分の二ほど埋まり、隊員総出で除雪している」との定時連絡を最後に、一行は音信を絶った。

まさか、ということが山の世界では起きる。

一九八一年五月、中国のミニヤ・コンカ峰（七五六六呎）で北海道山岳連盟隊の八人が滑落事故で帰らぬ人となった時もそうだった。うち七人はロープで数珠つなぎ状態のまま仲間の目の前で消えていったのだ。

同じ年の九月、インドのナンダ・カールト峰（六六一一呎）で、日本ヒマラヤ協会登山学校隊の七人が突然行方不明となった時の状況は少し、今回のものに似ている。

第一キャンプにいた隊長を除く日本人隊員全員が第三キャンプで忽然と消息を絶った。捜索の結果、大規模な雪崩の発生によるものと推測された。

昨年七月には、ソ連・パミールの高峰、レーニン峰（七三三四呎）のキャンプ地が、巨大な雪崩に襲われ、五ヶ国四十三人ものクライマーがデブリの下に埋まった。

八千呎峰の時代が一段落した現在、今後は五千、六千呎峰の難しさが問われてくるだろう。低くともそこは、ほとんど情報のない世界だから。

△ △ △

（江本嘉伸）

キー教師と山案内人』には、彼の名前をつけたクリスチャンというピークも

『スウィス日記』のリンゴの木

久合田 弘

一九七八年スイスのインターラーケ
ンで、とある病院の前庭に一本の巨大
なリンゴの木が赤くなり始めた無数の
実をつけて、天を覆って聳え広がって
いた。それを見た瞬間、私はその病院
は *Bezirksspital Interlaken* であり、
『スウィス日記』の筆者辻村伊助が友
人の近藤茂吉と、一九一四年八月
Gross Schreckhorn 登頂の下山途
中、雪崩に遭難負傷し、入院していた
病院だと直観した。

ある、と写真入りでその記事を載せて
いる。
連載されたものである。辻村はその中
で、このリンゴの木について「……前
庭に芝生を覆うて、一と抱えに餘る林
檜の樹が茂って……」とか、「……
：表の芝生に、覆い茂る林檎の樹は、
鈴なりの果ものが、枝のしなふばかり
に生って、花の上にもいくつとなく、
もう色づいた木の実がころがって居
る。私達は代わるがわるの杖を振って、
その実でゴルフをやって遊び廻った。
しかし三日目に、近藤が片輪(遭難で
骨折)になった足の力を、やけに両手
にこめて、貸しといた杖を逆にふりあ

げ、いやつと云う程力を入れるるとたんに、球はそのまま草に残って、土と一所に、セヴィラで買った名木の杖は、敢なき最後をとげてしまった、……」などとなっている。
彼が「一と抱えに余る」といったそのリンゴの木の幹は、六十四年後の一九七八年、私と妻との二抱えだった。その時撮った写真(資料Ⅰ)には、木が巨大すぎ、その四分の一ほどしか映っていないが、その分だけの実を数え(資料Ⅱ)てみたら、約七二五個あった。特に密集して実っていた頂上あたりが映っていないこのプリントから、実の数を植物統計的に推計すると、この一本全部では約三五〇〇個となす。まさに一本のリンゴの実の数としては驚異的な数である。
この種のリンゴは *Malus silvestris*



〔資料Ⅰ〕『スウィス日記』に記載されている *Bezirksspital* のリンゴの木: *Malus silvestris* Mill.

(1978年8月13日撮影)

なお辻村は病院名の中のkをgと書き間違っている。



〔資料Ⅱ〕図中の点は資料Ⅰにポリ塩化ビニリデンをかぶせ、リンゴの実を赤いマジックペンでプロットしたものである。その数は約725個だった。木全体では約3,500個のリンゴと推計した。

Mill. といひ、ヨーロッパのいたるところで見られる、改良を加えない原種野生のリンゴである。春から初夏にかけて、山野のいたるところで、裏は少し赤い白い可憐な五弁の花が緑の葉とともに青い空に映えている。そして夏には黄色みを帯びた赤い実をつけるが、小さいけれども芳香のある素朴な味のリンゴである。通常はせいぜい十センチそこそこの樹なのだが、これだけは三階建の病院の屋根を遙かにこえた高さまで広がっていた。
さて、このあたりで、この話は終りそうだったので、無念な現実をいま一つ書き加えなければならぬ。私が始めてこのリンゴの木を見て以来、強

Regionalspital Interlaken
Verwaltungsdirektion
Puschbach- und Gossens 30-2742-1
Telefon 026 / 26 26 26

2800 Interlaken, 22. Mai 1989 a/j/da

Mister
Nikomu Kugota
5 Chome II-7, Nagoromo
Takashi-shi, Osaka
592 JAPAN

Dear Sir,

Reference is made to your letter of 7th April.

The name of our hospital was up to 1976 *Bezirksspital Interlaken*. After 1976 the name was changed in *Regionalspital Interlaken*. That means, that it is a hospital for a whole region.

About this tree you sent us a photograph, we can say, that it is now more alive. We made a new parkingplace a few years ago and that tree was so old, that it had to be cut down.

We remain, Dear Sir, yours faithfully.

REGIONALSPITAL INTERLAKEN
Verwaltungsdirektion
Hunth

〔資料Ⅲ〕

く執着し、いつかこの木の正確な測定を願いつづけていた。とうとう昨年五月その希望を述べた手紙をその病院(一九七六年に改名されて Regional-spatial Interlaken となっている)へ出した。ところがやっときた病院管理部からの返書はまさに衝撃だった。その悲しむ返書はつぎのようだった(資料Ⅲ)。いずこも同じ自動車公害とでもいったらいいのだろうか。とにかくあの偉大な天然記念物のリングの木はもう存在しないのだ。

(一九九〇・九・一五)

ナムチャバルワ峰偵察隊

(第二報)

中国・チベット自治区の東端にあたる世界最高の未登峰ナムチェバルワ峰(七七八二呎)の偵察は西北西稜からの登頂の可能性を探り、ナイプンルートの六九〇〇呎に到達し、最低コルへの下降点を捜し出すと共に、主峰へのルート偵察を行うことが出来ました。十一月二十七日、空からの偵察を終えた私は、ベースキャンプに向けて早朝のラサを出発しました。ランクルはチベット高原をひた走り二十九日五七〇〇呎を走って格(キル)に到着し、そこから徒歩で二時間程で標高三五二〇〇呎の大

本宮に到着しました。接地当(ジェイ)チタンガ(チン)の四戸程の小さな部落のずれの放牧地であり、目前に今にも飛び立たんとする猛禽を思わせる山容のナムチャバルワ峰の西北西稜へ頂上へナイプンの長い稜線を望むことが出来ます。

地上隊は十六日ベースキャンプ入りした後、西北西稜へのルートを探り、前進基地を建設し、頂上稜線に続く支稜からの試登を行なって来ましたが、いずれも取付の水河の悪さ、岩の脆さおよび上部のハンギング・グレイシャーの崩壊により多発する雪崩のため、現在の合同登山の様式では、このルートを突破するのは無理と判断し、当初日本側が提案していたナイプンルートに変更し、新しいルート偵察が行なわれていました。

しかし十二月に入り、それまで快晴がつづいていた天候も一日中ナムチャバルワ峰を見ることが出来ない日が増して来て、悪化の兆しを見せ始め、早期に偵察を終了する必要を感じましたので、いったん全員がベースキャンプに集結、十五日までに試登を完了すべく、また登頂の可能性を確実にするよう再構築をしました。

十二月四日、日中各々四名が出発、六日には標高四八五〇『のC2から五六〇『のC3に至る「ラッパの口」

と呼ばれている急斜面に十ピッチのフィックスを張り、一回の荷上げの後九日にC3入りをしました。「ラッパの口」は雪崩の多発地帯として恐れられている所ですが、降雪の少ない秋では時々ハンギング・グレイシャーの崩壊による小雪崩がある位で、通過スピードが速ければそんなに問題にはならないように思えました。

十日には六三五〇呎にC4を建設し、十一日ナイプン峰への雪稜を辿り六九〇『に到達、そこから最低コルへ続く雪の棚を下りフィックスを張ると共に六六〇『の最低コル、そしてそこから頂上に伸びる氷雪壁の急斜面を観察し、併わせてスチール・ビデオによる撮影を行いました。

翌日はナイプン峰に登り、さらに広範囲に渡って偵察をする予定でしたが、夕方から強風が吹き続き十二日はC4にて停滞、翌十三日も風は弱まる様子を見せる気配もなく、気温も低くなり、既に真冬へと突入したと思われるのと合わせて、十六日はベースキャンプを出発しなければならなかった。以後の行動を断念、その日のうちにC2まで下り、十六日にベースキャンプを撤収、十七日夜ラサへと戻りその後成都、北京での会議を終えて二十四日に成田に帰着しました。

西稜、南稜の三つの大きな尾根の頂上に位置するわけですが、いずれも長大で末端は大きな絶壁となっており、それぞれ稜線に入り込むルンゼや支根は急峻で雪崩の危険性が大きく、ヨーロッパ的な単独や小人数のスピード登山でない、これを突破することは難しいと思われます。またいずれの稜線に到達しても雪質が悪く苛酷なラッセルが待ち受けています。

私は出発前からそれまでに集めることの出来た資料から、中国隊の試登したナイプンルートの可能性が最も大きいと思っていました。それは既に中国隊がナイプンの頂上まで到達している事実からではなく、合同登山という制約からすれば、キャンプサイトの安定していることがまず必要であったからです。

最低コルへの降り口から頂上稜線を眺めた限りでは、四十五度から六十度位の傾斜の岩稜とその右に氷雪壁が広がり、最低コルの近くに三本位のクレバスと七五〇『に付近で小さな岩壁が出て来ます。途中でキャンプサイトのない標高差一三〇『を一気に切り切る必要があるわけで、登頂には充分な技術と体力が要求されるでしょう。

山容・ルート的には一九八四年に初登攀することが出来たマッシュパルムの北西壁に酷似しています。それに付

加されるのが秋のシーズンということもあって、低温と強風が決め手ではないかと思えます。

今後は九月下旬の本隊の出発に向けて、二月には北京にて技術会議、四月に東京において議定書の調印が行なわ

今は亡き百瀬舜太郎氏を偲ぶ

孫 慶 錫

「大変なロマンチストだな」と当時山梨大学山岳会長であった高室陽二郎氏が、百瀬さんの訪韓登山記の原稿をみて言った言葉であった。

一九七二年、学長であった古屋直臣さんが、高室会長等九名、それに百瀬舜太郎氏を含めて一行十名が、夏の雪岳山に登られた。韓国側は筆者を含めソウル大学校文理大OB山岳会が受入れ、それに交流のあった成均館大学山岳部も混じえての親善交歓隊の集いである。

これより前、たしか一九六六年の晩秋であった。JACの折井健一さんより連絡があり、甲府の百瀬さん一行がライオンズクラブ国際協会アジア大会フォーラムの関係で、ソウルに行くがよろしくとの紹介があった。数日後ソウルに来られた百瀬さんは、JACの会員でもあり甲府名門南稜会の創立メンバーでもある山男との事で、すぐう

れる予定です。

偵察時の会員の皆様方の声援を感謝申し上げますと共に、本隊への支援をお願い申し上げます次第です。

偵察隊長 重廣恒夫

ちとけて夜更け迄ホテルでつきぬ山の話語り合った。その当時、百瀬さんは甲府中央ライオンズクラブの会長であり、韓国春川ライオンズクラブと姉妹クラブ締結を終えソウルで筆者に連絡をして下さったのである。

私とJACとのつきあいは、岸体育会館の時からであったから一九六〇年だと思う。田部重治、日高信六郎、三田幸夫、折井健一、交野武一、加藤泰安さん等を混じえて楽しい一夕があった。その後たびたび訪日して、会議のひまをみて秩父の山々、丹沢の山、そして北アも登ったりした。

あの折、韓国の雪岳山には未登の冬期縦走が残っておった。冬期二重テントの国内調達が思うように出来なかった当時である。その話をきかれて、甲府中央ライオンズクラブ、山梨岳連、在山梨韓国民団が各々二張ずつ計六張の冬期テントを、ソウル大文理大山岳

会に寄贈されるため来韓された。山梨岳連のテントは、百瀬さんがその前年台湾の玉山登山に使われた由緒あるテントであった。そのテントを使って雪岳山冬期西北主稜の初登攀を無事なしとげた事はもちろんである。

それから一九六九年だと思うが、私が所属しておったソウル大文理大山岳部員をつれて、富士山、南アの三山縦走と北岳岩壁登攀として北アの縦走と奥穂岩壁を登った二十日間の山登りであった。百瀬さんは我等の隊の引受けをして下さった。南アの時には広河原まで同行して下さって、夜叉神峠での南稜会で活躍された鳳凰三山冬山の思い出話は、アルピニストとしての面目躍如たるものがあつた。その話し声もなつかしい。

一九七二年、今度は百瀬さんと山梨大学の雪岳山登攀の話は前に書いた通りである。その登攀記をソウル大学新聞にのせるために書かれた原稿の冒頭が「我が谷は緑なりきではないが……」と書いた文章には、百瀬さんの山に対する純粹なる敬愛がこもっておったのであつた。それで高室氏がロマンチストだと感嘆したのである。

私と百瀬さんとの二十五年に及ぶつきあいは数々の思い出を残した。お互いの行きかきも十数度に及ぶと思う。特に二年前ソウルオリンピックの時、

来韓されて喜んでおられた数日間もあつた。それが最後の海外の旅となつたと聞き、万感こもごもの念にかられる。

出合いがあれば別れがあるとか！ 日頃百瀬さんが「白雲抱幽石」から由来する「抱石山房」と題された書齋に積まれた山書の中には、「自分の著書『忍行録、南アルプス』が残っており。そしてその山房での語りも、今はなつかしい思い出のみになった。

百瀬さんは山梨での山岳界の長老のみならず、数々のライオンズクラブの国際活動で名をあげられておられる。また甲府の商工会議所議員としての活動もあげなければならぬ。

告別式に間にあい、急拠参列した私が甲府の長禅寺で百瀬さんの遺影を仏壇に拜む事となつた。死出の装束が、山男のニッカーの姿だと言う。それが遺言であつたことを御夫人から聞いた。

私がいづも甲府駅につく時には、必ず出迎えをされておられた姿が、今度は見られなかった。まゆげは濃く長かったが、ほほえみをたたえてまっすぐ立っておられたあの姿が……。

百瀬さんのあの「白雲抱幽石」は理想の桃源境であつたと思う。その桃源境には、幽石の山々があたたかく氏を迎え入れてくれたものと考えながら御



冥福を祈るのみである。その永遠なる旅路を山姿で逝かれたおもかげをしのぶのである。
(韓国山書会会長)

日本三百名山に登る

市川 静子

八二年十二月、日本山岳会に入会して初めて出席した年次晩餐会の記念品に、『山日記』をいただいた。巻末に「日本の山と三百名山」の頁があって、日本の主だった山が標高順に記載されていた。※印は日本山岳会選定の「日本三百名山」と注釈がある。試しに数えてみたら、百四十座近く登っていた記憶があります。その時は三百名山を意識するまでには至らず、行きたい山に登れば満足でした。

八六年十月、船形山で会った木村伸子氏から、三百名山の一覧表をいただいたこと、静岡の廣澤和喜氏の案内で、憧れていた大無間山に登頂したのが弾みとなって、日本三百名山を完登するのが、大きな目標になりました。

三百名山は、全国に散在するので完登にはかなりの日数と費用がかかることになりましたが、学生時代から山登りを続けていたので、私の場合、約半数の百五十二座からのスタートになりました。その上、三百名山達成一步手前の仲間がいて、難しい山行に加えていただいたり、情報や資料を提供していただけたのも、有り難いことでした。そして九〇年十月二十九日、青森県

白神岳に登頂して、念願の「日本三百名山」を完登しましたが、鈴木孝氏(会員)の調査によると、達成は十番目、女性では三番目だそうです。或はそうでないかもしれません。難しかった山はカムイエクウチカウシ山、笈ヶ岳、毛勝山でしたが、呆気ない程簡単に登れてしまったのが、白木峰と護摩壇山でした。三百名山の中には焼山、浅間山、焼岳、桜島(御岳)など、噴火中で山頂が登山禁止の山があります。禁止や危険を犯してまで登頂するか、行ける所までで登ったとするかは各人の考え方によると思います。残りが四十座になった時、最後の山は白神岳に決めました。新雪で白く神々しく輝く山頂に立った夢を見ました。登頂の日は日本山岳会のトレナーを着た。胸に大きく3000の文字、長い登山人生の中で一番の晴れ姿である。山頂に雪はなかったが、中腹

の日本一のブナの原生林は紅葉の最盛期だった。山形支部の松田孝一氏と岳友金丸長造氏が同行してくださったが、両氏にとっては再訪の山なので、下山は初めてのコースを十二湖へくだる。体が黄金色に染ってしまいうような、素晴らしいブナの林の中を、日本三百名山に完登できた喜びを噛みしめて歩いた。この山行で金丸氏が日本山岳会に入会を決意されたのも嬉しいことだった。

深田久弥氏の著書を蒐集して

蒐集して

高辻 謙輔

一人の作家の全著書を蒐集するということとは、その著者への思い入れというか、私淑の気持からきているといっ

てよいかと思えます。深田久弥氏の著書は異版本、異装本、翻訳書などを含めると一三〇冊ほどになります。二、三の異版本を除き、その殆どを蒐集することが出来ました。

氏はかつて「私には雅致の心が欠けているから、自分の本の贅沢版を作ろうと思ったこともない」と書いたことがありますが、だからといって装幀や造本の立派な本を否定したわけではあ

りません。四百部限定の江川書房刊「翌檜」を初めとして「青猪」「津軽の野づら」「鎌倉夫人」など、昭和初期の作品集には造本に趣向をこらしたものが多く、山岳関係では昭和九年改造社刊の「わが山山」を初め「山岳展望」「山の幸」「山頂山麓」など美しい本があり、これらはいずれも谷口喜作の装幀によるものです。

戦中から戦後にかけて刊行された「翼ある花」「紫匂ふ」「春蘭」「少年部隊」「紫陽花姫」をとめだより」「命短し」「地球儀を持った子供たち」などは、時代を反映して紙質や造本は見劣りしますが、今では入手がむづかしくなっています。

「ヒマラヤ・山と人」は戦後再起第一冊として、「ヒマラヤの高峰」はヒマラヤ研究の集大成として、そして「日本百名山」は多くの人々に夢を与えた本として特筆すべきものといえましよう。

今まで一度も目にしたことがなく、入手出来ないでいるものに昭和十三年春陽堂刊の「雲と花と歌」があります。堀込静香氏の御教示により国立国会図書館で閲覧出来る事がわかりました。

私は、氏の文章の中では若き日の「大津岐峠を越えて銀山平へ」(山岳

展望」所収)を愛好するものですが、この紀行文には氏の作品の原点となるものが含まれているような気がします。

深田久弥氏、その六十八年にわたる生涯の喜び、苦しみを秘めたこれら百数十冊の蒐書の行く末はどうなるのでしょうか。出来ることなら散逸だけはさせたくないと思っております。

(越後支部)

秘境ブータン花紀行(2)

坂倉登喜子

ブータンのエーデルワイスは、ヒマラヤやインドの花に似てはいたが、この花は葉先がとがっていて、正にブータンの銀の星のまたたきにも似た感じで、日本の花なら上越や尾瀬に咲くホソバヒナウスユキソウのように葉が細くて、なよやかな風情であった。やがて源流近くのヤクの放牧場付近まで登ると、チョモラリ・ベース付近に辿り着いた。そのあたりは広々とした小さな流れのある緑の草原で、丸い石造りの山小屋があった。これが食事場で、私達はテントに二泊して写真を撮ったり、小さなリンドウの群れ咲く前山に登ってなお若くて綺麗なエーデ

ルワイスを探してカメラに納めた。

チョモラリの姿は朝ほんの僅かに雪の円い頂上を見せただけで残念だったが、私達は遙々と花との出会いを夢見てブータンを訪れ、あこがれのエーデルワイスが見られて大喜びだった。その夜は皆で祝宴を催し、歌の交換をしているうちに盛り上がり、スタッフと共に全員で踊りの輪が広がって、標高四二〇〇m地点の山小屋は沸き上がった。私も連れられてブータン踊りに加わったが、富士山より高い所で高山病にもかからず、八十歳で踊れたのは一生の思い出となった。

下山の日は再びエーデルワイスの咲く斜面でランチタイムをとり、花を思い切り撮って、往路一日行程を二日に分けて特別テント場を一回設置してくれた四日間を、帰りは三日間で出発点に戻り、元気に歩き終えて喜び合った。

今回のトレッキングは花への夢も大きかったが、ブータンの自然と心あたたまる現地民の素朴な親しみに接し、秘境ブータンの未知への探究ができたことは、素晴らしいことであった。

ブータン十五日間のトレッキングの苦しみの中の楽しかった思い出に、今もまだ酔い続けているが、この計画の発端は、朝日新聞社運動部の武田記者が、新聞に連載した千葉大の遠征報告

で、チョモラリ・ベースキャンプ付近にエーデルワイスが咲いていることを知り、出発前までいろいろと資料を頂きアドバイスを受けて準備を進め、二年間のトレーニングをした結果高山病にもかからず、無事目的を果すことができた。

そのため帰国後朝日新聞社に帰国報告を送った次第である。なお去る十月十四日NHKラヂオで「ブータン花の旅」の座談会をM、T両会員と坂倉が四十分間全国放送した。

想い出の栗ヶ岳

樋口 宗一

く砥沢の頭である。ヒュッテは雪で埋まり屋根だけ出している。相変らず人の姿はなく、静けさの中に時折風の音だけが聞えてくる。ヒュッテの中に入るのに雪の穴は狭く、スコップがあったので雪を退け入り口の戸を開けてやっと中に入る。流石には暖かい。荷物を置いて早々に出発する。ヒュッテよりは踏み跡がなく、ワカンを履き自分でルートを決めて登る。雪の吹き溜まりでは、思わぬアルバイトだ。北の峰の辺りからは雪もクラストして快適な登りができたが、ただ雪庇に注意しながら稜線を行く。この辺りは流石に気温も低く頬は痛いように冷たく、腰に下げた手拭は水って一枚の板のようになっている。

新潟県加茂市の南東に聳える、海拔一三〇〇mにも満たない栗ヶ岳を、昔の思い出を探るために、積雪期を選んで登る。積雪のため車は第二堰堤まで乗り入れができず、岳山寺前に駐車し朝六時三十分出発す。空は灰色で栗ヶ丘山頂はガスで見えない。朝早いせいか登山者の姿はない。第二堰堤迄は雪の状態が悪く歩きづらく、小俣口より小俣尾根取り付き点(二合目)までは多少雪も堅くなり登りには助かる。五合目付近からはナイフリッジとなり登りも険しくなり、鎖場付近ではピッケルで足場を切りながら慎重に登る。漸

ヒュッテより一時間三十分で山頂に着いた。その時、私の目から感激の涙が出てきて仕方がなかった。それは心身共に健康になって、想い出の山へ五時間かけても登り切れたことと、九十歳の母が、昔と変わらず家で心配して私の帰りを待っていると思うとまたたまらず涙がでた。一人ぼっちの山はセンチになるのかも知れない？
早々に下山開始。中の峰辺りに下ったころヒュッテの方面から三人の登山者が私の付けた踏み跡通りに登ってきた。人の気配にホッと、また私が先覚者気分でなんと良い気持ちだ。途

中若い男性三人にすれ違い頂上の様子などを聞かれ、登ってゆく彼等を見送り、ヒュッテで荷物をまとめて下山する。下に降りるにしがたって、気温が高く雪が軟らかくなり滑っては尻餅をついたり、一人苦笑しながら無事小俣登山口に下山した。また来年の冬に訪れることを心に誓い、家路を急いだ。

(越後支部)

年次晩餐会と記念山行

に参加して

中井 修二

新入会員として、初めて年次晩餐会と記念山行に参加して、両日とも未知の先輩会員から心暖いおもてなしに預かった感激が大きく、深く感謝しています。

それは晩餐会の休憩室と、開宴のテーブル席(49)木曾駒において、信濃支部からご出席の前田菊太郎さんから格別のご高配やお話を拝聴できたこと、記念山行では暮山の急坂にかかり、当日の強風にたじろぎ足運びが乱れ気味になった時、直ぐ後につづく先輩の女性会員が優しく励まし下さり、また私のリュックを頂上まで運んでいただいた暖かなふれあいを下さり、山行を果たし得たことを喜びつつ、深い

感謝をしております。

紙面を通じ満腔のお礼を申し上げます(ご氏名を不知、申訳なし)。今後、私は受身から反転し、会員相互の結びつきに努力いたしましょう。



図書

紹介

「越後山岳」

(創刊号(第五号))

集成復刻版

越後支部編

昭和二十一年に結成された本会の越後支部は、関西支部について全国で二番目に古い伝統ある支部である。その機関誌が「越後山岳」であり、本会の『山岳』に相当する。支部結成以来四十有余年、今日までに第八号(平成元年刊)が刊行され輝かしい支部の歴史を伝えてきている。しかし、現在では既にその第五号以前のものは、完全に入手不能となっているため、復刻版の再現をとの要望が高まり、その要望に応えたものが本書である。

収録内容は昭和二十年代から三十年にかけての越後支部の活動、会員の登

山記録、紀行文などであり、その編集は初代支部長の藤島玄氏自ら当ったものだという。各号は本会創立当時の先覚者たちの名が綺羅星の如くちりばめられ、また支部を盛り上げ育んだ前記藤島玄氏をはじめ、笠原藤七、佐久間惇一、花井馨、金山淳二、北村嘉助、齋藤平七、現支部長の佐藤一栄氏などの、今は既に故人となられた諸先輩から今なお響鑠として活躍しておられる諸先輩などの若き日の姿が燦然と輝いている。

本書を通読すれば、越後の山とそこを舞台として活躍した岳人たちへの敬意と遙かなる追憶。それと共に戦中、敗戦の混乱とうち続く戦後の荒廃、食糧・物資不足のなかで、かくも香り高き越後の岳人たちのロマンが存在していたことに対し、言い知れぬ深い感動を呼ぶものがある筈だ。

とにかく、本誌は、戦中、戦後復興期の、越後支部の歩みきたった歴史を知るための貴重な文献・資料集であると言えよう。JAC会員のみならず、越後の山々を愛し知ろうとする人々の必読の書と言える。

なお、本書は当初、予約による限定出版であったが、多少の残部がある由購入希望者は左記に申込みありたい。
〒九五一 新潟市宮所通一番町 学生書房 日本山岳会越後支部

平成二年十一月 越後支部刊 A5
判 五冊各号分冊一括箱入 六四四
頁 頒価六〇〇円(小倉厚)

南極点

R・アムンセン著
中田 修訳

アムンセンの「南極点」の全訳が出版された。訳者は三年前やはりスコットの「南極探検日誌」を全訳された中田修氏である。

一九一一年、アムンセンとスコットは、同時期に南極点をめざし、一足先に到着したアムンセンは無事帰還し、スコット隊が帰途全滅したのは余りに有名である。極点到達から七九年になる昨年の十二月、六ヶ国国際横断隊により、史上二回目の大ぞりでの到達が成された。この間、全訳がなかったのが不思議な位である。抄訳は谷口善也氏の「南極点征服」がある。スコットの「日誌」にしても「南極点」にしても、歴史的に有名でありすぎてかえって皮相的にしか理解されていないのではないかと思える。全訳が今までなかったことからでも判る。

中田氏は全訳の動機を次の様に語っている。
「自分が興味をもっている分野の基

本の文献がしっかりした形で翻訳されていなければならない。外国語の読める人でも、文献を読まずに言及している節がある。原文献を見る人もいるまいという安易さがあると疑っている。」と。英語版、独語版を訳し、さらに原著ノルウェー語版にあたるという気の遠くなるような仕事が一本に凝縮されている。

大陸(バリア)に上陸し、フラムハイムを建設する。隊員たちは、自分の役割を楽しみながらこなしていく。一種、遠征を楽しんでいる風である。フラムハイムを中心に雪洞を掘り進め、雪の館を作っていく。隊員たちのアイデアが活かされていく。蒸し風呂さえも作ってしまったのである。隊の明るさは常に失われることなく、極点到達隊にも感じられる。アムンセンの、隊員を信頼したリーダー性に拠るところが大きい。巻末の戯れ歌に、隊の陽気さが集約されている。クリスマス・イブの歌だが、フラムハイムでの生活やソリ旅行を楽しく歌っている。英語、独語版では後半が作文されているようで、なぜ作文されたのか不明とのことである。

通読して感じられるのは、周到な準備と計画を、楽しみに遂行している姿である。肖像写真から受ける冷厳な印象とは違って、探検家アムンセンの人

間的な面が見えてくる。明るさと落ちつきは、勝算ありの自信に基づくものだろう。

活版印刷の手ざわりもなつかしい造本で、楽しめる一書である。

平成二年八月二十五日 ドルフィンブ
レス刊 発売明倫出版 三三八頁
定価五八〇〇円 (宇都木慎一)

会報第27号

日本大学山岳部
桜門山岳会編

昭和五十八年度から六十三年度まで六年間の活動記録を編集したものである。

内容は、活動報告(昭和五十八年度〜六十三年度)、桜門山岳会報告、海外活動、海外個人活動、寄稿、追悼の六篇に大別される。

「海外活動」は、一九八六年秋、ヒマルチュリ南稜からの初登攀の報告である。この南稜コースは、五年前の一九八一年に同部が挑戦して敗退しており、今回は見事にその雪辱を果したことになる。しかし登頂者の一人を下山中に失うという貴い犠牲を払ったことであるが。

「海外個人活動」は、一九八四年日本山岳会カンチエンジュンガ縦走に参

加した隊員の記録、一九八四年日本山岳会学生部カナディアンロッキー登山隊の記録、一九八五年ヒマラヤ、クスム・カングルの記録(未登)、一九八八年マッキンリー峰の記録などである。このマッキンリー峰登山は、最年長が六十八歳、ほとんどが五十歳に近いうち、今はやりの中高年者による登山の記録である。

「寄稿」欄は、一九八八年五月五日、史上初めてチョモランマの頂上からテレビ生中継に成功した時のテレビ隊員中村進氏の報告。BCから頂上までの北東稜ルートが要領よくまとめられている。

追悼欄には十七名が誌されているが、このうち故金坂一郎についての石坂昭二郎氏が、戦後間もない十一月の富士登山を共にした時の印象を書いている。金坂さんには亡くなるまでの十年程、図書委員会の顧問になっていた。委員会では深い知識と豊かな話題で、いつも我々後輩をそれとなく指導して下さった姿を憶い出し、図書委員会の末席にいる者の一人として、ありし日の姿をしみじみと偲ばせて頂くことが出来た。

巻頭で、山岳部監督が最近の部員減少を歎いているが、それにしても本号の内容はバラエティーに富み高度なものである。これも伝統ある山岳部の然らしめるものであろう。

なお巻末にこの会報の一号(一九四八年)から二十七号までの総目次が収録されている。戦後の日大山岳部の流れを知る上で貴重な資料となるものである。

一九八九年八月 日本大学保健体育
審議会山岳部 桜門山岳会発行 一
六四頁 非売 (岩瀬皓祐)

〔報告〕

小川山初級岩登り講習会

指導・集委員会

十月二十〜二十一日の二日間小川山において初級岩登り講習会を開きました。二日とも無風快晴の好天に恵まれ、青い空と錦繡の紅葉に囲まれてまことに楽しいトレーニングでした。前夜から各人それぞれに現地入りし廻り目平にキャンプを張っていました

次代に残そう美しい山と溪

たが、朝九時半金峰山荘前に集合、早速岩場へ向かいました。

午前中はスラブ状岩壁の下部にザイルをフィックスしてそれぞれトップロープで練習し、昼食後は全員でガマ岩の岩峰を登りました。6Pほどですが美しい紅葉を眺めながら楽しい登りでした。山頂より2Pのアブザイレンで降り、四時半初日の練習を終了しました。夜は金峰山荘に泊り、ゆっくりと今日一日の反省を兼ね懇親の度を深めました。

翌日は朝から屋根岩尾根へ取付きました。南稜の下部でスラブ状の岩にザイルを張り、トップロープで練習しました。かなり難しい岩でしたが皆果敢に取付いていました。ふり返ると父岩や兄岩の岩壁に丁度同時に合宿に入ったJAC青年部や学生部の若い人が登っているのが見えます。昼まで練習し、廻り目平のキャンプ場まで一同揃って昼食後現地解散しました。参加十三名。(入澤郁夫)

尾瀬全国集会

婦人懇談会

平成二年十月六〜七日、尾瀬沼、長蔵小屋で全国集会を開きました。各人のコースで集り、夜は自然保護を軸に神崎忠男さん(海外連絡委員会理事)、

近藤緑さん(自然保護委員会委員)、平野紀子さん(長蔵小屋経営者)にそれぞれの立場でのお話を伺いました。

神崎さんからの、これから発会するHATJについての話は、広い地方の方々に知っていただくよい機会でした。ヒマラヤの登山隊の半分は日本隊であることやカトマンズ宣言、国際山岳連盟のこと、日頃あまり気にかけていない事柄が私たちにとってそれらとのつながりを考えるよい機会になったと思います。

毎年日本各地で、母と子の自然体験を通して仲間づくりや活動をつづける近藤緑さんのお話は、身近なことから実行してゆく姿勢を感じ自然保護に関わって生きた人として平野長英氏と、田淵行男氏の例をあげて紹介されました。

平野紀子さんは今は第二の登山ブームと位置づけて同じ中年としてこのブームを歓迎し、心ない登山者ばかりではないこと、尾瀬に住むことを「美の世界に住む者は美を守らねばならない、美のために戦わねばならない」を長英さんが座右の銘としていたのと同じく自分も座右の銘としていたこと、

尾瀬もかつては学者や文化人が力に考えたが、今は地元の人達が本当に考えるようになってきたこと、排水問題、トイレの工夫など、私たち登山者

の気付きにくい問題について熱意のある話でしめくり、参加者からも入山料、環境庁の地位、小屋のあり方、外国の現状など、尾瀬に集まったからこそ一人一人が自分への問いかけを深くしたと感じました。

一応ここまでと散会しても、同じホールに夜遅くまでいくつもの車座が出来、真剣に話し合う輪や、アルコールがにぎやかさをつくり出す輪と、北海道から九州の会員まで係としては心からうれしいことでした。

翌日はよい天気とはいえず、時には雨も降りましたが燧岳を越えていった越後支部のかたがた、沼山峠を越えていった福島支部の方とカナダ山岳会のステファニック夫妻、尾瀬ヶ原から鳩待峠へと向かった神崎さんのグループ、尾瀬沼を一周し、三平峠からも帰京しました。

婦人懇談会が参加者が多い集りを主催することはあまりないので、不行き届きの点もあり、あわてふためくこともありましたが、この経験を生かして次回の集まりもその山にふさわしい話題と共に、賑やかに盛り上げたいと思います。

東北方面を予定しています。今回同様、会員皆さまの積極的な参加をお待ちします。参加者 百三十八名 (穴田雪江)

忘年会報告

総務、集会、婦懇の共催による恒例の忘年会は、十二月八日出席者六十余名を集めて、定刻の午後五時から行われた。

司会の入沢氏のご紹介で、この度永年会員になられた織内氏の「忘年会は自分の歳を忘れる会にしたい」とのお話を伺った後、最年長の今井喜美子さんの音頭により乾杯となり、係の方々の心尽くしの数々のご馳走を賞味し、それぞれ好みのお酒を頂きながら歓談が続く。

宴半ばには中央に古風な「おでん鍋」が置かれ、たくさんのおでんが盛りだくさん間に片付けると、お替りが二度も出るという豪華さで、ますます盛り上がる。お酒も料理も一段落した所で福引が始まる。私は何が当たったのか分からないうちに、入沢さんからレポート用紙付の賞品を頂いてしまった。

賑やかな宴もやがて終りに近づき司会者のご挨拶の後、会場の片付けを手早く終り、八時過ぎには元通りとなり、未だ飲み足りない人はそれぞれ二次会へと散って行った。担当の方々のお骨折りに厚く感謝い

1989年度資料受入報告(1)

資料委員会

番号	品名種類	数量	受入月日	寄贈者	保管場所
599	トンキン竹 スキーストック	1対	'89. 4.13	高橋普作	M
600	布製 バケツ	1	"	"	M
601	ビニロン ヤッケ	1	"	"	M
602	キスリング	1	"	"	M
603	靴	1	"	"	M
604	アイゼン 4本爪X型	1	"	"	M
605	" " 箱型	1	"	"	M
606	ネパール帽 布製	1	"	"	M
607	ネパール帽 ビロード地	1	"	"	M
608	ストーブ(ホエーブス) ケース入り	1	"	"	M
609	人夫用背負子	1	"	"	M
610	薬製背負子	1	"	"	M
611	ワカン 爪付き	1	"	"	M
612	" 竹製	1	"	"	M
613	絵入り飾り用 ワカン	1	"	"	M
614	ランタン(折りたたみ式)	1	"	"	M
615	地図入れ	1	"	"	M
616	ワラジ	1	"	"	M
617	ワラゾーリ	1	"	"	M
470	チョモランマ三国合同登山(日本スポーツ賞)トロフィー、賞状				
154	楨さんの写真(大)(告別式に使用したもの)	1	'89. 5.20		O

たします。
報告
(川上光久)

警司岩探索山行(1)

科学研究委員会

平成二年十月二十日(土)の午後、参加者の大部分は、仙台駅から宮城支部会員の車に便乗させて頂き、二口温泉警司山荘に到着した。中には秋保大滝や表警司岩を案内して貰った者もいる。

午後五時より、柴崎徹宮城支部副支部長の講演が始まった。

「警司岩の人と自然」

―地学・民俗学・登山史―

「仙台の西方、大東岳と神室岳の間に位置する二口溪谷地域は、長さ数キロ、高さ数百数十メートルにおよぶ長大な障壁をなす岩帯が幾つか見られる。

その成因は奥羽脊梁山脈の造山運動によるもので、集塊岩と凝灰岩とからなり、いずれも流水や雨水による浸蝕を受け易い。このため柱状の岩塔や垂直の割れ目、あるいは数々の滝や石橋、洞穴、クローアールなどが見られる奇岩奇勝の景勝地となっている。これらの岩帯はほぼ東西に並んでいるので、糸岳東稜の南面すなわち二口沢側の岩帯を表警司、北面の大行沢側を日

陰警司、南面の太郎川側を太郎警司と呼んで区分している。

古来、二口では、これら豊かな自然と、そこに住む人々とのかわりが深く、陸奥から羽州に至る重要な交通路ともなっていた。古名は警神、警上、萬治などとなっており、警司は久しくイワガミの本拠地とされてきた。平安の頃、立石寺に生れ、二口溪谷に移り住んで符をしていた警司警三郎は、ある時日光権現に呼ばれて、日光戦場ヶ原の大ムカデを退治したので、日本国中の山の鳥獣を獲ってもよいとの免許を貰ったとの説話が残されていて、警三郎はその後、阿仁や奥州マタギの祖と仰がれるようになった。現在でも山中には古い峠道や番所跡が見られる。

警司岩は戦後、登攀の対象となり、表警司鳩ノ胸は一九五三年、仙台一高OBの三原・石川によって初めて完登された。警司沢は一九六六年スプール同人の及川・細谷・柴崎がF4に到達、その後、YMCA山岳会や山想会のメンバーが何度か試登を行い、一九七三年山想会の高橋二義が初登に成功した(当日配布資料中五頁の高橋氏の所属は山想会につき訂正)。その後新しいルートも幾つか開拓されている。」

柴崎氏は宮城県環境保全課の仕事もやっておられ、豊富な現地のスライド

1989年度資料受入報告(2)

資料委員会

番号	品名種類	数量	受入月日	寄贈者	保管場所
491	オットセイの毛皮ブーツ(マナスル登山で使用)	1	'89. 9.21	松田 雄一	J.D.
492	アイゼン	1	'89.10. 1	中村 テル	
265	ピッケル	1	'89. 8.20	"	
489	アイゼン	1	"	"	
390	写真昭和2年元旦冬富士登山時の浅間神社前にて	1枚	"	"	
493	古い地図 他	117枚	"	"	
ナシ	山と溪谷 バック No. 81号 82号	2冊	"	"	
266	ピッケル コーガン夫人隊使用	1	'89.11.27	エーデルワイスクラブ	
468	鋏登山靴 服部秀夫氏使用	1足	'89.11.21	塩沢 厚	
494	テント 夏用 ビニロン(ポール、ベグ) 4人用 ブルー 1969	1張	'89.11.27	エーデル、坂倉登喜子	M
495	" " " (") 4~5人用 薄緑 1975	1 "	"	"	O
496	" 冬用 " (") 2~3人用 赤 1966	1 "	"	"	O
497	" " " (") 4人用 黄 1963.1	1 "	"	"	M
498	" スペシャル(トイレ用) "	1 "	"	"	O
499	ツェルト " (") 2人用 800g	1 "	"	"	M
500	キスリングザック 帆布製 茶 尺5巾 昭和初期	1	"	"	O
501	" ベルーアンデス使用 ビニロン 黄 尺6巾 S. 41	1	"	"	M
502	サブザック 綿 薄緑 ヒーロー製 S. 40	1	"	"	M
503	ナイロンザイル 編み 白 11ミリ 30m S. 40	1本	'89.11.27	"	M
504	雨具ヤッケ上下 ビニロン 薄緑 細野製 S. 40	1着	"	"	O

も上映、植物の説明も加えられた。また庄司支部長以下、全員現役だという宮城支部の大東岳周辺における沢登り山行のスライドも、講演後映写された。これらのため、翌日山行に参加した多くの会員から「前日、時宜を得た説明を聞き、おおよその地形も判ったので、たいへん有意義な山行ができた。」との感想が寄せられることになった。

夕食後懇親会に移り、午後十時半就床。

十月二十一日(日)も快晴、六時半起床。七時半全員山荘の前庭に出て記念撮影。大東岳に登る二〇名のA班と、北石橋・裏警司岩の探索に向かう一二名のB班に分れて七時四〇分出発した。二名は所用のため仙台に向かった。

— 続く — (中村純二)

会務報告

十二月理事会

十二月十三日 十八時四十分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、入沢、穴田、伊丹、神崎、小林、石橋、小倉、藤井、松本の各理事、小倉、鳴原、大島、平林、橋本、大森の各常任評議員、太田監事

〔委任出席〕重広、西村、山本、早坂、織田沢、関口の各理事、飯野監事

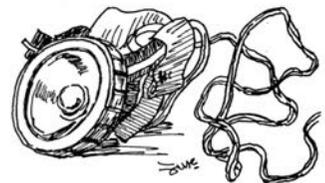
▽講事

(1)ナムチャバルワ登山の件(伊丹・村木)

西北西稜からのルートは雪崩の危険があり断念、目下ナイプンルートの偵察中である。年内(平成二年)には帰国の予定であるので、帰国を待って具体的準備にかかりたい。現在のところ、偵察隊に要した費用は一三三〇万円である。

(2)石岡会員からの要望書の件(藤平)

本件については、石岡氏の了解を得て、石岡氏側の見解ならびに本会としての見解をまとめて会報で公表することを考えていたが、篠田軍治氏が亡くなられたこともあり、中断した形になっている。しかし折角まとめた資料でもあるので、いづれにしろ活字にしておき、その発表方法等については、正・副会長、常務理事会に一任することにした。



金沢守恭(三六二七)
大場撰雄(三八四一)
退会

影山 淳(八三六八)
千坂雅子(七四三八)
西村 勉(九九四七)
会名変更

三井銀行山岳部↓太陽神戸三井銀行山岳部

タンポチエ僧院再建協力
募金者ご芳名

十万円(株)アドベンチャーロード代表取締役前谷東雄、ヒマラヤ観光開発株式会社。九万九千円(株)杉並区役所。五万円(株)須々田秀美。一万円、八千七百円(株)大森弘一郎。一万円(株)北村義男、山本幸生、鈴木昭、森川正勝、宮澤美渚子、新妻徹、山口節子、葉師義美、二塚謙三、牧潤一、濱野吉生、斎藤惇生、平山暁子、池元善秋、岩崎三郎、坂下直枝、権藤太郎、降旗義道、関口令安、三輪文一、近藤友好、平山善吉、小倉重子、川井耿子、篠田勝久、小倉茂暉、金沢守恭、村川八重子、鈴木耕治、高山忠四朗、小田薫、池田智恵、高橋はつ子、鈴木嘉、岩崎正男、中島伊平、阿部慎二、藤井英夫。五千円(株)後藤邦慶、野田尚志、小山睦子、牛田清彦、坂本義章、豊田博、金森繁三郎、三戸田一郎、片桐理一郎、宮崎和夫、

宗實慶子、小松原一郎、森宏子、原利恵子、星勝雄、小野季子、甲斐邦男、川合愛子、小池恭弘、藤本幸一、庄司駒男、平山寛、三尾龍民、山本篤、本郷三好、本郷夫人、千田武久、福田智恵子、岡本和彦、佐野誠、梨羽時春、高辻謙輔、久保田優一、吉武玲子、遠藤京子、山口峯生、小田隆治、板谷宗治、川島栄三郎、鮑津博史、武田満子、岸栄、高原三平、松久幸司、古川沙朶、小林碧、川口直能、魚本定良、堀田幸子、大橋克也、日下田実。三千元(株)岩名地菊夫、吉田英一。三万三千元(株)募金事務局。
一月七日現在累計四一八名、累計金額四、二四五、三七四円



この電話でもお知らせしています
3234-6659

●設立二十周年記念山行

岐阜支部

期 日 平成三年五月二十五日(土)

場 所 恵那峡国際ホテル 岐阜県恵那市恵那峡 TEL〇五七三

一六〇一一

費用 宿泊代(懇親会含)一泊三食 二〇〇〇円(弁当、罐ビール、記念品代、輸送代含)

集合 五月二十五日(土) 恵那峡国際ホテル 午後三時五時頃

記念山行 五月二十六日(日) 恵那山

申込み先 〒500岐阜市加納奥平町一

二二 高木基揚宛 TEL〇五八二七三一二六

五〇(夜間のみ) 住所、氏名、電話番号、参加費同封の上、四月三十日(火)までに申込み下さい

●図書委員会の催し

(1)第二十二回山岳図書を語る夕べ

テーマ 山の画文集について

講師 山里寿男氏

日時 三月十五日(金)六時三十分より

場所 山岳会ルーム

(2)第二十九回この一本展

テーマ 山の画文集

日時場所 「山岳図書を語る夕べ」に併催

●自然観察山行
自然保護委員会
テーマ 亜高山帯の森林と大型哺乳類の観察
講師 山中豊彦氏(自然公園指導員)

場所 奥秩父、小鹿野町尾の内(両神山の北、標高一〇〇〇位)

期日 三月三日(日) 日帰り

費用 三千元(バス代)

集合場所 新宿西口スバルビル横

集合時間 午前七時

携行品 雨具、弁当、防寒具

申込み 二月二十八日(木)まで事務局内自然保護委員会までハガキまたは電話で(雨天決行)。

●山岳地域における環境保全シンポジウム

一し尿・雑排水処理問題

登山人口の増加に伴い、山岳地域におけるし尿・雑排水処理の問題は、近年ますます切実となり、避けて通ることのできない状況となりつつあります。

今回、私共は標記のシンポジウムを開催し、山小屋における処理の現状や試み、環境庁の取組み方法と共に、既設トイレを利用できない山域や冬山で、登山者はどうのように対処するのが自然環境に対し、より好ましいかと言った問題についても討議したいと考えております。お誘い合せの上、多数ご参加下さい。

日時 平成三年四月六日(土)午後一時から五時まで。

場所 青山学院大学「正面入ったとこ

ろに会場の案内板があります。

地下鉄、表参道 JR、渋谷駅下車

参加費 一〇〇〇円(予稿集代他)

演題と講師

(1)山小屋のし尿処理問題

東京農業大学

永嶋正信

(2)浄化槽の機能と構造

東京大学

中西準子

訂正

『会員名簿』

(3)北アルプスにおけるし尿処理実験

燕山荘

赤沼健至

(4)尾瀬におけるコンポスト化方式

長蔵小屋

平野紀子

(5)景勝地におけるし尿難排水対策

環境庁自然保護局 小原豊明

(6)登山者の排泄処理はどうすればよい

か 自然保護委員会 中村純二

科学研究委員会

自然保護委員会 共催

編集後記

◆平成三年も本格的に稼働しはじめました。ナムチェバルワ峰登山、HATの国際会議やら上高地山研の改修やらで忙しいことになりそうです。会員諸兄姉の執行部へのご協力をよろしく。◆編集部からは、投稿原稿はなるべく短かく、要領よく書くことと、送付先は必ず小倉厚の自宅(338 浦和市木崎五一五-八)へ、を重ねて願います。

平成三年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一三二六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂